出る杭研究

# 放牧で畜産をバージョンアップ―酪農、豚―

福島幹貴（獣医保険看護学科）、小山美南（動物応用科学科）担当教員：大木茂

## 研究の背景と目的

現在の日本の酪農で放牧を取り入れている牧場は少なくつなぎ飼いの牧場も多いため、放牧を導入することで、飼料高騰への対応、アニマルウェルフェアの向上、労働時間の削減、付加価値の創出が期待できると考えた。**本研究では、放牧酪農、一般的な酪農、アニマルウェルフェアに配慮した養豚農場を訪問して、今後の日本畜産の方向性として、放牧の可能性を示したい**。

## 研究・調査方法

放牧酪農5牧場、都市近郊の酪農家3牧場、養豚企業の計９農場を訪問し、生産者への聞き取り調査を行いそれぞれの特徴を整理した

## 結果と考察

①



②



③



④





⑤



**放牧を行っている牧場の事例**

**①磯沼ミルクファーム**

特徴：東京都八王子市にあり、都市近郊での部分放牧を実施。臭害対策としてコーヒー粕を敷材として使用。放牧は育成牛と乾乳牛。

メリット：都市が近いことによる、牧場・レストランへの集客

**②薫る野牧場**

特徴：神奈川県の大野山の上で行う山地酪農。メインは山を牛に整えてもらい土砂崩れなどの災害を防ぐこと。牛は山のノシバを摂食。

メリット：土砂崩れなどの災害対策、牧歌的な風景。山の土地利用

**③新利根協同農学塾農場**

特徴：利根川の横での放牧。放牧地は川から流れてきた砂の上で牧草地を形成。粗飼料自給率はほぼ100%。

メリット：土地の再利用、川沿いにある広々とした牧場という景観

**④キープ協会**

特徴：山梨県の清泉寮内にある、有機JAS認証を受けた牛乳を販売している観光牧場。堆肥を牧草地に散布など循環型農業も実施。

メリット：放牧を観光として利用、放牧を生かした循環型酪農

**⑤神津牧場**

特徴：群馬県甘楽郡にある日本最古の西洋式農場。自然豊かな土地で放牧を行っており、牛の行軍が人気。

メリット：放牧と観光の結び付け、アニマルウェルフェア

一般的な酪農の牧場は、**清水牧場**は機械搾乳の導入、**石田牧場**はジェラート屋による6次産業、**小泉牧場**は地域との密着性を活用し、養豚の丹沢農場では、厚さ1.2mの敷料を用い、豚が自由に動ける環境を整えていた。このように、家畜に配慮した飼育環境や飼料への工夫によって付加価値を高めていた。また、**放牧を行うことで、動くことによる健康増進、放牧による土地の再利用、牛が牧草を食べ、堆肥が牧草地にまかれる循環型酪農、自然と牛による景観からの観光への利用など、放牧を行うことによる可能性が考察できる**。

## これから

放牧酪農だけでなく、都市近郊酪農が生き残るには、今回の3件の酪農からは、レストラン、ジェラート、などの6次産業化が必須であると思われたが、それに加えて、酪農を市民に教育する様な仕掛けを行うことが合わせて必要なのではないかと思われた。